

永井荷風と『下谷叢話』

和田 英 信

はじめに

中国古典文化を受容した地域をかりに漢文文化圏とよぶならば、日本も当然その文化圏の中にあつた。またその圈内における文化の伝播のあり方を川の流れに喩えるならば、中国が上流にあり、日本が下流に位置することはいうまでもない。ここで下流というのは、いささかも卑下するものではない。下流にはさまざまな水の流入による多様な要素の集積と、なによりも豊かな水量がある。いま、日本における漢文文化の豊饒をみるひとつの試みとして、永井荷風とその著作『下谷叢話』を取り上げてみよう。『下谷叢話』には、きわめて多くの人物が登場し、江戸東京の地を舞台に、豊かで興味ふかい漢詩文の世界が再現されてゆく。荷風が江戸文化の残照のなかに書き留めようとした漢文文化のありようの一端を探ってみようと思う。

永井荷風と漢詩文

荷風が漢学の素養を有していたことはよく知られるが、ここではまず荷風と漢詩文とのつながりを整理しておこう。荷風は明治十二年（一八七九）十二月三日生まれ。本名は壮吉。父、永井久一郎（一八五二〜一九一三）は尾張の人。

号、禾原。若くして尾張藩督学の鷺津毅堂に師事した。毅堂は『下谷叢話』の主人公の一人で幕末から明治にかけて活躍した漢詩人でもあった。久一郎は維新後、明治新政府に職を得た毅堂を追って上京して内務省、文部省などに勤めたのち、日本郵船に転じ、上海支店長、横浜支店長など、要職を歴任した。また名古屋にあつては森春濤に、上京後は大沼枕山に詩を学んだ。永井久一郎は師である鷺津毅堂の次女、恒をめとり、長子、荷風をもうける。毅堂は荷風の外祖父にあたる（略系図を後に掲げる）。

荷風は書香の家の子弟たるにたがわず、小石川竹早町の東京府立師範附属小学校在学時には儒者某の許に立寄つて『大学』『中庸』の素読を受けた（『葦齋漫筆』）。また父の友人でもあつた漢詩人岩溪裳川のもとに通い、『三体詩』を教わる。

漢詩の作法は最初父に就いて学んだ。それから父の手紙を持つて岩溪裳川先生の門に入り、日曜日毎に『三体詩』の講義を聴いたのである。裳川先生はその頃文部省の官吏で市ヶ谷見附に近い四番町の裏通りに住んで居られた。玄関から縁側まで古本が高く積んであつたのと、床の間に高さ二尺ばかりの孔子の坐像と、また外に二つばかり同じやうな木像が置かれてあつた事を、わたくしは今でも忘れずにおぼえてゐる。

（「十六七のころ」）

岩溪裳川（一八五二〜一九四三）は丹波福知山の人。名は晋、字は士讓。若くして詩を森春濤に学び、春濤の子、槐南と並び称された。著に『裳川自選藁』五巻がある。荷風とは後々まで親交があり、荷風は時に自作の詩の添削を乞い、また『下谷叢話』を著すにあたって折々に不明のことを問うている。

荷風の詩作については、のちにみずからその詩稿を永代橋上より水に投じたというが、中学生の時を振り返る次の文章には、その少時の作と思われる七絶が見える。

たしか中学を卒業する前の年の事かと記憶する。どう云ふ訳か逗子へ半月ばかり行つてゐた時の事を半紙二帖ほどに書いたものが、今だに自分の手篋の底に保存されてある。成島柳北が仮名交の文体をその儘に模倣したり剽窃したりした間々に漢詩の七言絶句を挿み、自叙体の主人公をば遊子とか小史とか名付けて、薄倖多病の才人が都門の榮華を外にして海辺の茅屋に松風を聴くと云ふ仮設的哀愁の生活をば、いかにも稚氣を帯びた調子で且つ厭味らしく飾つて書いてある。全篇の題は紅蓼白蘋録と云ふので挿入した絶句の中には、

已見秋風上白蘋。

青衫又汚馬蹄塵。

月明今夜消魂客。

昨日紅樓爛醉人。

年来多病感前因。

旧恨纏綿夢不真。

今夜水樓先得月。

清光偏照善愁人。

なぞ云ふのがあつた。今日読返して見ると覚えす噴飯する程である。わづか十四五歳の少年が「昨日は紅樓に爛醉するの人」と云つて居るに至つては、文字上の遊戲もまた驚くべきでは無いか。

(「夏の町」)

みずからを「紅樓に爛醉する人」と言いなし、落魄した蕩子の風懷を口ずさむすがたは、のちの荷風がしばしば好んで作り上げた主人公像（それはしばしば自画像でもあつた）に、わずか十四、五歳にして通じている。しかもそれが漢詩というかたちをとつて形象されていることは注目してよい。

明治三十年（一八九七）、荷風十九歳、父、久一郎の上海赴任に同行することとなる。後年、異国にあつての家族の団円を振り返つて次のように綴る。

毎年庭の梅の散りかける頃になると、客間の床には、きまつて何如璋^①の揮毫した東坡の絶句が懸けられるので、わたくしは老耄した今日に至つても猶能く左の二十八字を暗記してゐる。

梨花淡白柳深青。 柳絮飛時花滿城。

惆悵東欄一樹雪。 人生看得幾清明。

……

其年陰曆九月十三夜が陽曆のいつの日に當つてゐたか、わたくしは記憶してゐない。しかしまたまこの稿を草するに當つて、思ひ出したのは或夜父が晚餐の後、その書齋で雑談して居られた時、今夜は十三夜だと言つて、即興の詩一篇を示された事である。其詩は父の遺稿に、

蘆花如雪雁聲寒。 把酒南樓夜欲殘。

四口一家固是客。 天涯俱見月團圓。

としている。

……

凡ては三十六七年むかしの夢となつた。歲月人を俟たず、匆々として過ぎ去ることは誠に東坡が言ふが如く、「惆悵東欄一樹の雪。人生看るを得るは幾清明ぞ」である。

(「十九の秋」)

經書の素読、詩作の訓練などに始まり、漢詩を素材として入れ込んだ小説創作、さらには上海渡航など、荷風は漢詩文の濃厚な雰囲気^②に圍繞された場において人となつたと言つてよい。彼の著述活動もまた、その香味をあちこちに漂わせている。

明治三十五年（一九〇二）、荷風最初の単行本『野心』の冒頭には、清・趙翼の七律「争名」が引かれ、「甌北先生

集中有此一律。題曰爭名。蓋有所感而作者耶。欽佩之余。摘錄卷眉。荷風小史手記」と漢文の題辭を記している。⁽²⁾

また大正二年（一九一三）三月、文学仲間であつた黒田湖山直道宛ての書信には、『玉楮記』といふ長い小説を書き初候。大に漢詩趣味を発揮せんと企て申候。うまく行くかどうか？其の中おたづね申可候」と述べる。

『玉楮記』は完成を見なかつたが、大正期の荷風の文業のなかでは完成度が高く、かつ漢詩文と泰西文学の両方の趣味を混交させながら独自の「無常悲哀の寂しい詩趣を帯び」た「荒廢の詩情」⁽³⁾を存分に發揮する作品『雨瀟瀟』が生まれるまでの道筋には、やはり常に漢詩文がその傍らにあつた。

大正六年（一九一七）九月、荷風は『断腸亭日乗』を記し始める。その冒頭は「九月十六日 秋雨連日さながら梅雨の如し。夜壁上の書幅を掛け替ふ。碧樹如烟覆晚波。清秋無尽客重過。故園今即如烟樹。鴻雁不來風雨多。姜逢元等閑世事任沈浮。万古滄桑眼底収。偶□心期歸図画。□□蘆荻一群鷗。王二亭」⁽⁴⁾というように二篇の漢詩を掲げるに始まる。

同じ年の十二月十日には「快晴。紅箋堂佳話起草。」と見える。この『紅箋堂佳話』こそ後に改作をへて『雨瀟瀟』となるものであつた。十二月二十二日には「紅箋堂佳話を書きはじめてたれど興味来らず。筆を抛て神田を散歩す。夜半輪の月よし。沢田東江の唐詩選を臨写す」。そして同年の除日の日記には、再読して批評せんとするものとして、泣菫、鏡花、柳浪、紅葉、一葉、柳北、春水、鳴外、蜀山人、也有、默阿弥の作品のほか、漢文のものとして『入蜀記』、『菜根譚』、『紅樓夢』、『西廂記』、『隨園詩話』の名を挙げる。

その後、「紅箋堂佳話」の執筆は難渋挫折したが、大正九年（一九二〇）十月、あらためて『雨瀟瀟』を起稿し、十二月二十四日、「小説雨瀟瀟大半稿を脱す。大正七年の冬起稿したりし紅箋堂佳話を改作したるものなり」。翌十年一月五日、『雨瀟瀟』は脱稿し、三月『新小説』誌上に発表された。伝える人も乏しい浄瑠璃の古曲、蘭八節の哀切の調べに寂寥の情調を重ね合わせた本作には、森春濤、趙嘏、郎士元、白居易、杜牧、杜荀鶴、そして王次回らの詩句が鏤められている。荷風得意の作であつただろう。ちなみに「瀟瀟」は雨の降るさまをいう荷風愛用の語だが、もとは『毛詩』鄭風「風雨」の「風雨瀟瀟たり」に由来する。

かく見てきたように、荷風の文業においては、少時より後年に至るまで一貫して漢詩文との密接なつながりと嗜好がうかがえる。そうした流れの中で、荷風の漢文趣味のひとつの頂点と見なしうるものが『下谷叢話』に他ならない。人のよく知るところ、『下谷叢話』は荷風が師と仰ぐ鷗外の『渋江抽斎』に触発されてなつたものである。

大正十一年（一九二二）七月九日、鷗外は逝く。そしてその全集の編纂に荷風も与ることとなる。翌十二年五月十七日夜、配本された鷗外全集所収の作品を順次読み進めるうち、荷風は『渋江抽斎』と出会つてたちまち魅了され、興奮を次のように記す。「夜森先生の渋江抽斎伝を読み覚えず深更に至る。先生の文この伝記に至り更に一新機軸を出せるものゝ如し。叙事細密、気魄雄勁なるのみに非らず、文致高達蒼古にして一字一句含蓄の味あり。言文一致の文体もこゝに至つて品致自ら具備し、始めて古文と頗頗することを得べし」。

三日後には、津輕藩医であつた抽斎ゆかりの土地を訪う。「五月二十日。昨日の散策に興を催せしのみならず、鷗外先生の抽斎伝をよみ本所旧津輕藩邸付近の町を歩みたくなりしかば、此日風ありしかど午後より家を出づ。津輕藩邸の跡は今寿座といふ小芝居の在るあたりなり。総武鉄道高架線の下になりて汚き小家の立つぐのみなり」。同所は現在の江東区緑二丁目のあたりである。

同月二十七日には、抽斎の墓誌を撰した海保漁村の『漁村文話』を繙読。七月十日より鷗外の『伊沢蘭軒』を繙き二十五日に読了。二十七日の日記に「穀堂鷺津先生の事績を考證せんと欲す」と記すに至る。

八月以降は「鷺津先生事跡考証のため」、「春濤詩鈔」「東京才人絶句」「星巖集」「五山堂詩話」などを読み、大沼枕山の詩鈔を繙き、八月十九日には谷中に赴いて枕山の墓を典し、穀堂の先妻室佐藤氏の墓を掃い、さらに穀堂とその後配川田氏すなわち外祖母の墓を拝している。二十一日には岩溪裳川を訪ねて『春濤詩鈔』について教えを乞ひ、二十二日、麹町下六番地に枕山の遺族を訪ね、二十六日には下谷区役所に赴き大沼氏の戸籍を閲覧。二十九日の日乗には「午前下谷竹町なる鷺津伯父を訪ひ追懷の談を聴く。穀堂枕山二先生事績考証の資料畧取揃ひ得たり」という。驚くべき精勤である。そして起稿は同月三十一日、「終日鷺津先生事績考証の資料を整理す。晚餐の後始めて考証の

稟を起す。深更に至り大雨瀧来る。二百十日近ければ風雨を虞れて夢亦安からず」。

翌日九月一日、関東を大震災が襲う。ために執筆は少しく中断するがやがて作業を再開し、十月八日、枕山の娘大沼嘉年を訪い、借りていた大沼家過去帳写を返す。十七日には「鷺津家の祖幽林翁の事を問はむが為、尾張国丹羽郡なる鷺津順光翁のもとに書簡を送る」など準備を進め、十一月三日の日乗には「鷺津穀堂大沼枕山二家の伝を起草す。題して『下谷のはなし』となす」と記す。十一月、十二月には足繁く麻布飯倉の紀州徳川家南葵文庫に通い、武鑑・漢籍などを閲覧。こうして「下谷のはなし」は大正十三年（一九二四）二月より七月まで雑誌『女性』に連載。同十五年（一九二六）三月、改稿して『下谷叢話』と名を改め春陽堂から出版された。昭和十四年（一九三九）、さらに改稿して富山房より『改訂下谷叢話』として刊行される。またさらに昭和二十五年（一九五〇）刊行の中央公論社『荷風全集』第十三巻に収める『下谷叢話』にも、荷風は増補と改訂を施している。

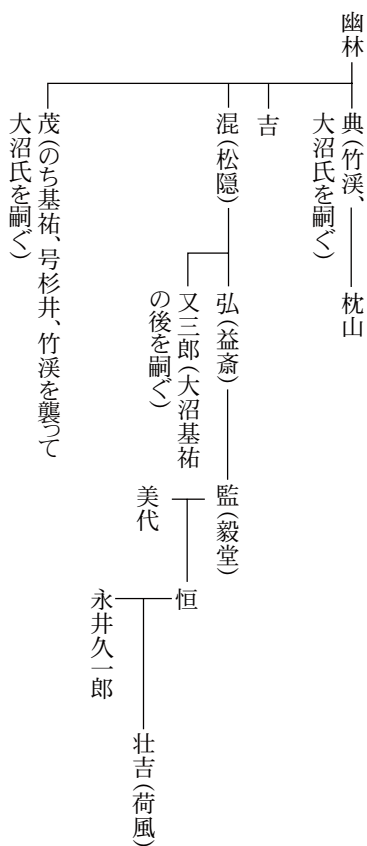
『下谷のはなし』『下谷叢話』の命名は、外祖父、鷺津穀堂が明治四年（一八七一）、下谷竹町（台東区台東二丁目）に構えた居にちなむ。なお大沼枕山も嘉永二年（一八四九）、下谷御徒町（台東区上野六丁目）に居を卜し、維新後、森春濤もこの地に詩社を設けた。いずれも現在の、いわゆるアメ横に近い場所である。

『下谷叢話』の世界

『下谷叢話』は、大沼枕山および鷺津穀堂の生涯の叙述がその中心となる。大沼枕山は文政元年（一八一八）に生まれて明治二十四年（一八九一）没。鷺津穀堂は文政八年（一八二五）生まれ、明治十四年（一八八二）の没。ともに江戸末期から明治にかけての代表的漢詩人である。

『下谷叢話』は、まず鷺津家の世系をたどることから始まる。まず紙数をさいてその人を語るのは穀堂の曾祖父、鷺津幽林である。幽林は享保十一年（一七二六）生、寛政十年（一七九八）没。尾張丹羽（いまの一宮市丹陽町）の人。京に上つて学び、故郷にもどり医師を業とす。尾州公（徳川宗睦）が藩校明倫堂の学官に招くも、某儒官の妬み

を買ったため就かず上洛する。のち、脚氣を病み、郷に帰って亡くなる。幽林の長子が竹溪で、家を継がず江戸に出て大沼又吉の養子となる。この竹溪の子が枕山である。一方、鷺津家は三男松隠が継ぎ、その子が益斎、益斎の子が穀堂である（以上、第一、以下『下谷叢話』の該当する章節を示す）。左に系図を示しておく。



『下谷叢話』は次いで枕山の父竹溪に紙幅をさく。竹溪は宝暦十二年（一七六二）生まれ、文政十年（一八二七）没。少時、江戸に出て大沼家を嗣ぎ、幕府に出仕、西丸附御広敷添番衆。文化末年、致仕して上野近辺に住む。

荷風は考証して、竹溪が時の江戸詩壇において相当の地位を占めていたことを述べ、交遊のあった人として、柴野栗山、古賀精里、大田南畝、斎藤拙堂、頼杏坪、大窪詩仏、菊池五山、館柳湾ら錚々たる人々の名を挙げる。おそらくは竹溪が人々の記憶から遠ざかっていたことを慮つてのことであろう。竹溪が江戸にあつて詩名を得ていた時期、すなわち文化・文政年間、ちょうど江戸詩壇の盛時にあたった。荷風はまた竹溪が大学頭林述斎の知遇を得て、林家の別墅での詩筵にしばしば招かれていたことを特記する。林家に共に招かれた人には大窪詩仏、菊池五山らの名も

見える。両者は市河寛斎・柏木如亭亡き後の江戸の詩壇における領袖であつた（第二・第三）。

続く「第四」からはいよいよ『下谷叢話』の主人公の一人、大沼枕山についての叙述が始まる。文政元年（二八一八）枕山が生まれたとき、父竹溪は五十七歳。枕山が十歳のとき、竹溪は亡くなる。大沼の家は理由が不明ながら、枕山ではなく竹溪の末弟、すなわち枕山の叔父が嗣ぐ。枕山はこの叔父と折り合いが悪く、ひとり尾張に走り鷺津の家で過ごしていたらしい。当時、鷺津の当主は益斎で、その子にはのちの穀堂があり、門弟には森春濤がいた。枕山・春濤という明治期を代表する詩人二人がここで交わりを訂めるにいたる。枕山は天保六年（一八三五）、十八歳の冬、再び江戸に戻る。そして亡父、竹溪の故人であつた江戸詩壇の大立者、菊池五山、大窪詩仏、さらには前年江戸に来てお玉ヶ池に詩社を設けた梁川星巖の周旋を得て、枕山は江戸の詩壇に地歩を築いてゆくこととなる。

『下谷叢話』に覚える興趣のひとつは、詩人と彼を取り巻く環境が日月を逐つて詳細に綴られているところにある。文化文政、そして天保期の江戸には、職業としての詩人を成り立たせる文学環境が整つていた。そのありようが具体的に語られているのである。

当時の詩人を支えていたものにはまずパトロンがあつた。大沼枕山におけるそれは曹洞宗の僧侶、梅痴上人である。梅痴はかつて京都にあり、頼山陽らと詩文の交わりをなし、江戸に来たつてよりは梁川星巖や菊池五山の詩筵に出入りしており、そこで枕山を見知つたらしい。梅痴は寛政五年（一七九三）生まれ、枕山より二十六歳の年長であつた。枕山は芝増上寺の学頭としての梅痴を頼り、御徒町の家を出て芝の学頭寮（現在の港区芝公園二丁目）に寄寓することとなる（第九）。

のち梅痴は結城（茨城県結城市）なる弘経寺の住職となり、のちに飯沼（茨城県常総市）の弘経寺に移る。枕山もしばしば結城と江戸を往来し、飯沼にも出かけている。梅痴は枕山を経済的に援助する一方、梅痴が詩集を刊行したり、梅痴の詩が選集にとられて世に出る際には、枕山がその選択や添削を行った。

むろん荷風は、梅痴と枕山との關係を互いの利害にのみ基づいて結ばれたものとしてとらえている訳ではない。詩作に勤しむ梅痴のかたわら、酒を酌みつつ下問に答える枕山のすがたを記す枕山「酒痴歌」の引を引き、「わたしはこの引を読んで清絶言ふべからざる思に打たれた。芝山内の僧房に老僧は端座して詩巻を攤き、年少の詩人は酒杯を手にして灯下に相對してゐる光景が歴然として目に浮び來たつた故である」(第十二)と、両者の年の差をこえた信頼關係に感激の思いを綴る。

また詩人を支えるものには遊歴があつた。枕山の場合には最も多くその目的地に選ばれたのは房州であつた。もとより遊歴はその地の漢詩愛好者に詩を講じ字を揮毫して収入を得ることが目的の第一であり、あわせていわゆる「江山之助」、すなわち各地の風光のなかに新しい詩興・詩材を得ることも余祿としてあつたであろう。天保九年、枕山の最初の詩集『房山集』は、前年、初めて房州に遊んだ成果であつた(第六)。その後も枕山はたびたび房州に出かけた。かの地に詩友、鈴木松塘のあつたこともその理由であろう。枕山はまたほかに上州、信州などにも遊んだ。

天保十一年(一八四〇)以来、芝の学頭寮に身を寄せていた枕山は、弘化元年(一八四四)、芝を去り下谷御徒町に家を借りる(第十三)。嘉永二年(一八四九)には下谷御徒町三枚橋の南畔(現在の台東区上野六丁目)に地所を買い家を建てる(第十八)。のち枕山は『下谷吟社詩』を刊行するが、下谷に家を設けてよりは、詩を講じ弟子たちの詩を添削することが主たる生計の途であつたはずだ。『下谷叢話』は嘉永七年(一八五四)、枕山の「元日下谷幽居」詩を引く、「乞詩人聚小梅傍、潤筆有贏錢滿囊、一任故人誇厚祿、我家春情未淒涼」(第二十三)。「詩を乞う」スポンサーと潤筆によつて、枕山の家計はゆとりを得ていたのである。『下谷叢話』ではこのほか詩家の詩文集や選集の刊行のありかたや背景、詩人の移動、詩社の興廢など、当時の詩人と詩壇のありさまを細やかに再現する。『下谷叢話』は、たとえば名を改めて『荷風詩話』と称してもよいように思う。江戸末期から明治に至る詩壇の変遷のありさまを活写するこの書は、中国宋代以来の詩話の伝統の掉尾を飾る著述のひとつと言つてもよい。

このような江戸期の詩人の具体的な生態をみるほかに、『下谷叢話』の興趣覚えるところは、漢詩と地理との関わりを詳細に語る点がある。たとえば例としてお玉ヶ池を挙げよう（荷風の頃の神田松枝町で、現在の千代田区岩本町二丁目）。荷風が「お玉ヶ池の地は久しい間東都文雅の淵藪となつてゐた」というとおり、早くは寛政の初めに市河寛斎がこの地に江湖詩社を開き、文政三年（一八〇六）、大窪詩仏が詩聖堂を営む。これが文政十二年に焼失したのち、天保五年（一八三四）、梁川星巖がここに玉池吟社を営み、これが枕山が江戸詩壇に地歩を得る機会を与えた。「梁川星巖の声望は都門の青年詩人を一堂に会せしめ善く相交る機会をつくらしめた。大沼枕山が孤劍飄然として江戸に帰るや否や忽にして莫逆の友を得たのは重に星巖が吟社の席上に於てある」（第五）。荷風は、弘化二年（一八四六）、梁川星巖が此の地を引き払ったのちのお玉ヶ池にも関心を寄せ、嘉永年間には横山湖山、明治には永阪石埭が彼の地に居を卜したことに言及している（第十四）。

お玉ヶ池の他にも、墨水での賞月、不忍池での観蓮など、いわば江戸の歌枕について『下谷叢話』は関心を寄せる。荷風はのちに墨水については「向嶋」、不忍池については「上野」という、『下谷叢話』の拾遺、続編とも言うべきエッセイを重ねて綴っている。こうした場所・空間への荷風の関心の背景には、江戸と大正とをつなぐ「場所」への独特の幻視があるように思う。天保十二年（一八四一）、枕山が芝の学寮付近に遊び、服部南郭の遺居を詠じた詩を取り上げ、荷風は次のように述べる。「枕山は明治十一年に刊行した『江戸名勝詩』にも赤羽橋を詠じて「想見当年詩道盛、我欽享保老才人」となし重ねて服部南郭を追慕してゐる。赤羽橋の江戸時代の詩人にとつては、此のほとりに曾て南郭の住してゐたがために永く忘るべからざる勝地となつた。恰吾等大正の文学者が団子坂を登ることに鷗外先生を懷ふて悵然とするが如きものであらう」（第十）。

当然ながら荷風みずからもこの地を訪ねており、「（大正十二年）十二月三十日。晴天旬余に及ぶ。午後赤羽橋に服部南郭が旧居の跡を尋ねしが得ず。森元町新網町辺より新門前町の辺人家多く倒潰するを見る。赤羽川の沿岸土地柔きがためなるべし。夜執筆深更に至る」という。服部南郭の故址は今の港区東麻布一丁目、地下鉄赤羽橋駅のそばである。

先に述べたように、荷風は鴟外の『洪江抽斎』を初めて読んで感銘を受けた三日後、抽斎ゆかりの旧津輕藩邸の周辺に足を伸ばしている。屋こぼたれ草むしても、此の地はなお古の彼の地にほかならない。そうした江戸と大正をつなぐ土地への執着は荷風文学の特徴のひとつであろう。

『下谷叢話』のもう一人の主人公、鷺津穀堂は弘化三年（一八四六）のち、江戸を舞台とするこの物語にはつきりと姿を現す。枕山二十九歳、穀堂二十二歳（第十五）。これ以降、『下谷叢話』は枕山と穀堂の事蹟を並行して述べていくこととなる。そしてそこに浮かび上がってくるのが、両者のおよそ対照的な人物像である。

化政盛時の著宿のいくたりかが存命であった天保年間に詩壇に現れ、詩人としての活動を始めた枕山と異なり、穀堂が江戸で詩人となった頃にはすでに大窪詩仏は亡く、梁川星巖も西に去り、ほどなく菊池五山も没している。あわせて清国における鴉片戦争の消息も伝わり、米国の艦船も姿を見せて世情騒がしき時を迎えていた。

嘉永三年（一八五〇）、二十六歳の穀堂は、辺海の武備の整わぬを憂い、『聖武記探要』三卷（道光二十六年、一八四六年、清・魏源『聖武記』十四卷の抄録）を刊行し、町奉行の詮議を避けるため、房州に逃れることとなる（第十九）。幕府は人心の混乱を避けるため、世人が海防を論じることを禁じていた。また穀堂は水戸の攘夷派とも連絡を結び、嘉永六年（一八五三）には『告詰篇』一卷を著して水戸前中納言斉昭に献じている（第二十二）。

これに対し枕山については永嘉七年すなわち安政元年（一八五四）、『下谷叢話』は云う、「此年幕府はいよく英米露の三国と仮条約を締結したので国論はますます沸騰した。然るに枕山の依然として世事に閑せざる態度は「偶感」の一律よくこれを言尽している。「孤身謝俗罷奔馳、且免竿頭百尺危、薄命何妨過壯歳、菲才未必補清時、莫求杜牧論兵筆、且檢淵明飲酒詩、小室垂幃温旧業、残樽断簡是生涯」。わたくしはこの律詩をこゝに録しながら反復してこれを朗吟した。何となればわたくしは癸亥震災以後、現代の人心は一層險惡になり、風俗は弥頽靡せんとしている。此の如き時勢に在つて身を処するいかなる道をか取るべきや。枕山が求むる莫れ杜牧兵を論ずるの筆。且つ檢せよ淵

明が飲酒の詩。小室に幃を垂れて旧業を温めん。残樽断簡是れ生涯。と言つてゐるのは、わたくしに取つては洵に知己の言を聴くが如くに思はれた故である」(第二十二)。

こののちも毅堂は、尾張の藩校、明倫館の督学として改革を行い、また先の藩主、徳川慶勝の信任のもと、慶勝の勤王の方針を承け、大政奉還、鳥羽伏見の戦いから江戸開城期にかけて尾張藩政の推進に一定の役割を演じたのち、明治新政府に仕えて陸奥の登米県知事、司法省の官員を勤め、俗事に積極的に関わる一生を送る。かたや枕山は一貫して野にあつて詩人としての生を全うした。

枕山と毅堂とを並べてみたとき、荷風が心を寄せていたのが枕山の方であつたことは、右に引いた一節に見る如く明らかである。毅堂については、中根香亭による諷刺文『天王寺大懺悔』、毅堂晩年の講詩の不評を伝える岩溪裳川『詩話感恩珠』を引くほか(第四十二)、外祖父たる人を直接に月旦する文辞は見られぬ一方、枕山に対するナイーブなまでの共感の吐露は、『下谷叢話』の中にたびたび繰り返される。

先に荷風の「場所」に対する執着に似た関心に触れた。感傷と耽美の入り交じつたその嗜好は、『日和下駄』(大正四、一九一五年)にも次のように謳われている。「今日東京市中の散歩は私の身に取つては生れてから今日に至る過去の生涯に対する追憶の道を辿るに外ならない。之に加ふるに日々昔ながらの名所古蹟を破却して行く時勢の変遷は市中の散歩に無常悲哀の寂しい詩趣を帯びさせる。およそ近世の文学に現れた荒廃の詩情を味はうとしたら埃及伊太利に赴かずとも現在の東京を歩むほど無残にも傷ましい思をさせる処はあるまい。今日見て過ぎた寺の門、昨日休んだ路傍の大樹も此次再び来る時には必貸家か製造場になつてゐるに違ひないと思へば、それほど由緒のない建築も又はそれほど年経ぬ樹木とても何とはなく奥床しく又悲しく打仰がれるのである」。

『下谷叢話』に描かれる江戸から明治の漢詩文の世界は、自らの足が踏みしめるこの土地のうえにかつてたしかにあつた。しかしそこは、もはや行き辿り得ぬ幻の世界でもある。桃源への逢着と失路。その意味においては、荷風の多くの作品に見いだされる構造と趣向が『下谷叢話』にも通底していると言ふことができよう。大正の荷風と江戸と

の間には明治維新があり、さらに『下谷叢話』の成る直前には、江戸からのつながりを物理的に崩壊せしめる大震災があった。代表作のひとつ『澤東綺譚』ではみづから桃源への道を絶ちきった荷風であったが、江戸漢詩文の世界はもとよりその手間を要せぬ彼岸であった。その行きて辿り得ぬ世界のなかで、荷風に代わって生きているのが荷風の筆によって描かれる大沼枕山であったのであろう。

『下谷叢話』の物語は、終わりに至って、その枕山の嫡子の凄惨な行く末を語る。「大沼枕山の嫡男大沼湖雲の一家は東京市養育院に収容せられて死亡したのである。而してその遺骨を葉王寺に携来つた孤児の生死のついては遂に知ることを得ない」。枕山の長子新吉（号、湖雲）は廃嫡され、大正四年（一九一五）三月八日、小石川区大塚辻町十八番地東京養育院で死亡し、翌月、妻、はな、翌年には、長女、富喜子も養育院に死亡したという。元治元年（一八六四）生まれの新吉の享年は五十二歳であった。東京市養育院は、東京の困窮者、病者、孤児、老人、障害者の保護施設として設立された。^⑦ 養育院のあった大塚の地は荷風が幼時過ごした小石川金富町の家に近く、湖雲新吉の亡くなった大正四年は、荷風が『下谷叢話』の執筆にあたつた時期とさほど時間を隔てていない。

『考証 永井荷風』が「枕山の子孫が名利栄達を遂げていたら、おそらく荷風はこの史伝をつくらなかったであろう^⑧」というのは極論であろうが、枕山の長子の凄惨な末路が荷風の嗜好になつていったことは間違いない。^⑨ 同時にまた、桃源としての江戸と、大正の現実との断絶をこれ以上ないほどに痛ましくも鮮やかに伝えている。

結びにかえて

荷風の漢詩文の趣味と素養については本稿の最初にみたところであるが、江戸漢詩文の世界の魅力に荷風の眼をあたらためて開かせたのは鷗外の史伝小説であった。

鷗外森先生が晩年の著述に係る江戸儒医の諸伝は、啻に伝中の人物に止まらず、汎く江戸時代の儒家文人の生涯に

ついで無限の感興を覚えしめたり。我にして若し森先生が蘭軒抽象の伝をよまざりせば、恐らくは終生江戸儒家の文集を手にするの機をなかりしや知るべからず。幸にしてこれ有ることを得たりしは洵に先生が著述の賜なり。おもへば三十年のむかし柵草紙の訳文に始て泰西文学の何たるかを教へられ、三十年の後に至りて江戸儒医の記録によりて化政の詩文中一読せざる可らざるもの多きことを知り得たり。余の先生に対して感謝せざる可らざる事の多きや今さら言ふもおろかなり。

（『葦斎漫筆』）

もとより荷風は、館柳湾、大田南畝、成島柳北らに對し関心を寄せていたが、『下谷叢話』脱稿後、彼らのことは枕山と同じように自己を重ねあわせる対象として、あらためてとらえ直されたように思う。ために、数多の漢詩文を渉獵して考証の筆を起こすこととなり、『葦斎漫筆』、「太田南畝年譜」、「成島柳北の日記について」、「柳北仙史の柳橋新誌につきて」など少なからぬ稿が生み出された。これらも含めて『下谷叢話』の周囲には、これを中心とする衛星の如き著述群がある。「向嶋」、「上野」、「礪川徜徉記」などがそれである。荷風にとって江戸の漢文世界は二度ともどれぬ場所であると同時に、読むことによつて、あるいは書き綴ることによつて、すなわち文字の世界においてのみ帰ることを許された世界であつた。そう思い至れば、『下谷叢話』の長年にわたる改訂は、むしろ誤謬をただし正確を期すところに主たる目的があつたであろうが、同時にまた筆を加え続けること自体に意味があつたと言えるのではあるまいか。

小稿は冒頭で、中国の古典文化と日本との關係を川の流れの上下にたとえた。筆を擱くにあたつて、中国文化の末流にある江戸漢詩文の世界に関する荷風のことは引こう。

わが旧時代の芸文はいづれか支那の模倣に非らざるはない。それは恰大正昭和の文化全般の西洋に於けるものと異なる

ところがない。我国の文化は今も昔と同じく他国文化の仮借に外ならないのである。唯仔細に研究し来つて今と昔との間に稍差異のあるが如く思はれるのは、仮借の方法と模倣の精神とに關して、一は飽くまでも真率であり、一は甚しく軽浮である。一は能く他国の文化を咀嚼玩味して自家葉籠中の物となしたるに反して、一は徒に新奇を迎ふるにのみ急しく全く己れを省る遑なきことである。これそも何が故に然るや。今人の知能古人に比して劣れるが故か。将又時勢の累するところか。わたくしは知らない。わたくしは唯墨堤の処々に今猶残存している石碑の文字を見る時鵬齋米庵らが書風の支那古今の名家に比して遜色なきが如くなるに反して、東京市中に立てる銅像の製作西洋の市街に見る彫刻に比して遙に劣れるが如き思をなすのみである。江戸旧文化の支那模倣は当代の西洋模倣に比較して、誰か優劣なしと言ひ得るものがあらう。

(『向嶋』)

古を引いて今を陋となす、いかにも荷風らしい慨嘆ではある。しかし「旧時代の芸文」を「真率」ととらえ、「他国の文化を咀嚼玩味して自家葉籠中の物となし」たものと見なすことばは、『洪江抽齋』と出会つて以来、江戸漢詩文の世界に耽溺した、またそれによつて幼時よりの漢詩文に圍繞された経験と記憶が滾々とたぎり溢れてきた荷風の、まさに真率なる実感であつたことは間違ひあるまい。

【注】

荷風の文章の本文は『荷風全集』(岩波書店、一九六二―六五年)に拠つた。ふりがなは一律にこれを省略し、漢字は常用字体に改めた。

(1) 何如璋は当時東京にあつた清国公使。荷風の父と交遊があつた。

(2) 趙翼「争名」は『甌北集』卷三七所収。荷風の題辭は私に句点を施した。

(3) 『日和下駄』

(4) 姜逢元は明の人。書家として知られる。王一亭は名、震。清末民初の人。実業家であると同時に書家・画家としても知られた。荷風は「先考所蔵の画幅の中一亭王震が蘆雁の図は余の愛玩して措かざるものなり」(『断腸亭日乗』)という。以下、典拠を示さぬ荷風の事蹟、文章は『断腸亭日乗』による。

(5) 岩波文庫『下谷叢話』の成瀬哲生「解説」は、『日和下駄』や『澤東綺譚』は、下町に足を運ばせる。少なくとも地図を傍らに読めば、遙かに興を増す作家である。空間を言語化するという点では、比類なき作家であると思う」と言う。

(6) 湖雲廃嫡の背景については、安田吉人「漢詩人大沼枕山の生涯」(田園調布学園大学『調布日本文化』5、一九九五年)に考察がある。

(7) 養育院の後身、東京都健康長寿医療センターのホームページによる。

(8) 秋庭太郎『考証 永井荷風』(もと一九六六年、岩波書店、いま岩波現代文庫、二〇一〇年による)。

(9) 秋庭太郎(注8前掲書)は続けて「これは荷風のうらぶれ趣味に発した著作と云い得る」といい、安田吉人(注6前掲論文)は「竹盛天雄『下谷叢話』縁起―初出から改作へのみちすじ」(『文学』昭和四〇年九月号)の「伝記作者荷風みずからが、長子流謫の悲運にあった。(中略)新吉一族の悲劇的結末の生み出す凄絶さは、破壊型の荷風にのみふさわしい史伝」という指摘を承け、(荷風は)「湖雲の悲劇をも自らに重ねていたのかも知れない」という。荷風は昭和二年十二月二十七日、山形ホテル食堂において東京日日新聞夕刊紙上に古賀茶溪の孫に当たる五十余歳の男が乞食となって深川砂村付近を徘徊しているのを東京市社会局調査委員の探知する所となったという記事を読んでこのことを日記に記している。古賀茶溪は『下谷叢話』にもその名が見える古賀精里の孫、侗庵の子である。精里以来、三代続けて昌平塾儒官を勤めた。